

平成29年度

初任者・2年目・3年目 研修における 自己研修の進め方

～年間の取組と集合研修に向けて～

【ガイドブック】

ー自己研修を支えるすべての方へー

平成29年4月



岩手県立総合教育センター

目 次

はじめに	1
I 自己研修の考え方	2
II 校内での自己研修の進め方	
1 自己研修の取組過程	3
2 Plan（計画）の段階	4
3 Do（実行）の段階	7
4 Check（評価）の段階	8
5 Action（改善）の段階	10
6 ポートフォリオ	11
III 2年目「宿泊研修」における研究協議「自己研修の発表と協議」について	12
1 目的	
2 準備するもの	
3 自己研修計画書の事前提出について	
4 研究協議の方法	
IV 3年目研修講座「センター研修」における研究協議 「自己研修の発表と協議」について	13
1 目的	
2 準備するもの	
3 自己研修計画書と自己研修のまとめの事前提出について	
4 当日の交流について	
V 自己研修の1年間の流れ（小学校・中学校）	14
自己研修の1年間の流れ（高等学校・特別支援学校）	16
VI 「自己研修計画書」および「自己研修のまとめ」（様式集）	
「自己研修計画書」【様式1】	18
「自己研修のまとめ」【様式2】	19
VII 「自己研修計画書」および「自己研修のまとめ」（記入例）	
小学校 【記入例①】	20
中学校 【記入例②】	22
高等学校【記入例③】	24
特別支援学校【記入例④】	26

はじめに

このガイドブックは、研修体系の見直しによって平成26年度より新設された、初任者の3年間の研修における自己研修を円滑に進めるために、学校内での支援態勢の充実を目指して発行するものです。

本県に採用となった教員は、1年目に、総合教育センターの初任者研修講座で、配布された「教員のための自己研修の進め方 アクションリサーチの手法を用いて」のテキストを用いて自己研修についての理論を学びます。2年目には、その理論に基づき、各学校において自己研修を実践し、宿泊研修において交流することで、自身の取組の見直しを図ります。その後、各校に戻って自己研修を充実させ、3年目には、センター研修において交流をすることで、その進め方を確かなものにします。この3年間の取組によって、生涯に渡って学び続ける教師となるための実践力を身につけていくことになります。

ここでいう自己研修とは、児童生徒の成長を期し、研修者個人が自己の課題を見つけ、課題を解決するために行う主体的な取組のことを指します。その進め方には様々な方法があり、こうでなくてはならないと決まっているものではありません。ですから、このガイドブックで説明する進め方を参考にしながら、各研修者は、それぞれの実態に応じて主体的に取り組み、さらに、各学校においては、研修者を支援していただきたいと思えます。

また、自己研修と言っても、その取組は個人で完結できるものではありません。そこには、取組の進捗状況をチェックしたり、各過程において適切なアドバイスをしたりする校内での担当者が必要です。

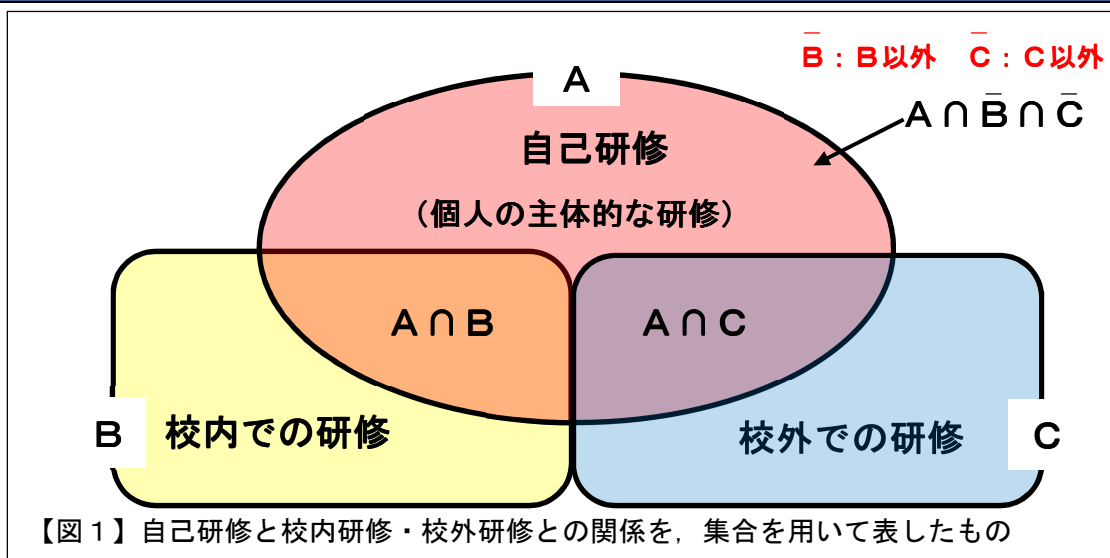
さらに、研修者が自身の取組を振り返って見直したり、自己の成長を確認したりするためには、研修者相互の交流や校内での交流が欠かせません。そこで、研修者相互の交流を、2年目「宿泊研修」および3年目「センター研修」において設定しました。校内での交流については、各校の計画に基づいて適宜行われることに期待します。

自己研修を実践する研修者や支援するすべての先生方に、このガイドブックをお読みいただき、円滑で充実した自己研修が実現されることを願っています。

平成29年4月

岩手県立総合教育センター

I 自己研修の考え方



「初任者・2年目・3年目研修における自己研修の進め方～年間の取組と集合研修に向けて～【ガイドブック】—自己研修を支えるすべての方へ—（以下「ガイドブック」とする）では、【図1】に示すように、研修の主催者や場所によって、研修の種類を「校内での研修」と「校外での研修」の2種類に大別しています。そして、主催者や場所に関わらず、個人が自己の課題を意識して意図的に取り組む研修を「自己研修」と定義しています。

【図1】の具体的な内容は、次の【表1】のとおりですが、2年目・3年目研修における自己研修は、【図1】における $A \cap B$ と $A \cap C$ のことを指しています。

【表1】 「自己研修」, 「校内での研修」, 「校外での研修」の内容

種類	内容の解説
A 自己研修	児童生徒の成長を期し、研修者個人が自己の課題を見つけ、課題を解決するために行う主体的な取組のすべてを指します。
B 校内での研修	所属校で行う研修のことを指します。 (例 校内授業研究会、授業公開、校内の各種研修会、教科部会、学年会、日常の取組、協議・相談など)
C 校外での研修	所属校以外で行う研修のことを指します。 (例 教育センター研修、教育事務所研修、教育委員会研修、他校の学校公開、校外の各種研修会など)
$A \cap B$ 校内での研修における自己研修	2・3年目研修における実践の場を指します。校内において、児童生徒の成長を期し、研修者個人が自己の課題を見つけ、課題を解決するために行う主体的な取組のことです。学校内での(指導)担当が必要となります。
$A \cap C$ 校外での研修における自己研修	2・3年目研修(センター研修等)における実践交流のことを指します。内容は、校内での研修における自己研修の実践の交流です。
$A \cap B \cap C$ 勤務時間外に行う自己研修	課題を設定したり、交流や発表をしたり、指導や助言を受けたりすることを目的としない研修者自身の自発的な取組のことを指します。 (例 教育書を読む、講演を聴く、教材研究をする、など)

II 校内での自己研修の進め方

1 自己研修の取組過程



過程	研修者の取組	校内担当者の取組
① p. 5 へ	児童生徒の実態や指導の実態等から、研修の領域や分野を決め、自己研修で目指す姿が分かるように設定します。	児童生徒のあるべき姿と実態や、教育実践のずれを感じている部分等から、問題に気づかせるようにします。
② p. 6 へ	目指す姿の実現に向けて、取り組むいくつかの内容を参考となる資料等を基に決定します。	取組内容を決定する際には、過去の研究資料や担当者の経験等から、適切な助言を行います。
③ p. 6 へ	具体的な取組内容、実践期間、実践後の結果の観察・分析の内容を考えて計画を立案します。	学校の年間計画上、無理のない計画となっているか、力量に合致しているかという視点から助言します。
④ p. 7 へ	計画に基づいて、一定期間内で実践をします。 自己研修では、実践の中で Plan に戻ったり、何度も実践を繰り返したりします。長期間の場合は、実践が1回ということもあります。	実践を研修者任せにせず、参観するようにします。 参観の目的は、助言によって実践を充実させることではなく、研修者自身が自らの実践を客観的に分析・考察できているかに留意しながら適切な助言を行うことです。
⑤ p. 8 へ	実施後には、計画時に考えた「児童生徒のゴール像」にどれだけ近づくことができたかについて、観察・分析を行います。 実践を繰り返す場合には、改善点を次の実践に反映させます。	実践の分析が確かなものとなっているか、分析の対象や、結果の原因や今後の見通しなどについて、適切な助言をします。答えを教えるという姿勢ではなく、研修者自らが気づくような助言が大切です。
⑥ p. 9 へ	「自己研修のテーマ設定」から「結果の観察・分析」までを振り返り、文章でまとめます。 自己評価とともに、自己研修を発表し、実践交流を行うことで、他者からの評価も大切にします。	実践結果ではなく、テーマ、取組内容、計画、実践について、まとめさせます。 校内で、取組を発表する機会を設定し、評価してあげることが大切です。
⑦ p. 10 へ	評価を基に、自己研修を次のステップに進めます。テーマは同じで取組内容を変える場合や、テーマそのものを変える場合も考えられます。	今回の自己研修による成果と課題を明確にした上で、次の取組につなげるようにします。研修意欲を高めることに十分留意します。

2 Plan（計画）の段階

(1) 自己研修のテーマ設定から計画立案まで

- ・「教員のための自己研修の進め方」p. 14～15にあるPlanシートや記入例などを参考にして、Planを立てます。日頃の問題意識を自己研修につなげることが重要です。
- ・センター研修で提出する自己研修計画書の様式は、このガイドブックのp. 16に掲載しました。「振り返り」や「実践交流」の段階で自己研修について発表したり報告したりする際の資料であることを意識して作成することが大切です。

自己研修計画書【様式1】

学校名 _____ 学年・領域 _____ 氏名 _____

1 自己研修のテーマ

2 テーマ設定の理由

現状把握、自己研修のテーマ設定、テーマの明確化の内容をまとめて文章化します。
「自己研修のテーマシート」「Planシート」を拠り所とします。

3 テーマ達成のための手だて

情報収集・予備調査、方法や手立ての立案、児童生徒のゴール像の内容をまとめて文章化します。
「Planシート」を拠り所とします。

計画立案の内容をまとめて文章化します。表形式でもよいです。
「Planシート」を拠り所とします。

4 研修のスケジュール

月日	実践の場	実践内容

5 結果の観察、分析の計画

観察・分析の項目	観察・分析の方法や材料
	方法や手立ての立案、児童生徒のゴール像設定の内容をまとめます。 「Planシート」を拠り所とします。

◆学校としての留意事項◆

- ①学校の中で、適切な担当者を決めて取り組む必要があります。
- ②研修者と担当者の取組を、学校として支えていく必要があります。
- ③担当者の負担も考慮し、場合によって、担当者のチームを置く必要があります。
- ④担当者は助言をしすぎないことを、学校として共通理解しておく必要があります。

(2) 「自己研修計画書」作成上の留意点

ア 自己研修のテーマ

- ・日頃感じている理想と現実のギャップの中から問題を見つけ、テーマ設定につなげます。
- ・取り組む分野・領域と目指す児童生徒の姿をできるだけ具体的に表現します。
- ・目指したい児童生徒の姿とそれに照らした児童生徒の実態、児童生徒の実態を変容させるための指導のあり方などを整理してテーマを考えます。
- ・自己研修のゴール像をテーマとして示します。

(テーマの設定例)

- 自信をもって自分の考えを表現できる国語の授業づくり
- 一人一人の児童が「わかる」算数の指導の進め方
- 学び合いのある社会科の授業の進め方
- 生徒の科学的なものの見方や考え方を高める考察の書かせ方
- SHRを活用した、他を思いやり協力し合う学級づくり
- やりがいを感じて自主的に係活動に取り組む集団づくり
- 知的障がいのある生徒に合わせた数学指導のあり方

◆担当者の心構え1◆

助言は、研修者の考えを深めるヒントを与えるためのものであり、担当者の考えを押しつけないことが重要です。

◆助言のポイント◆

- ①テーマは、児童生徒の成長につながるものか。
- ②実践をする際に、無理のないテーマか。
- ③実践後に自分で観察・分析できるテーマか。
- ④一定期間、実践する価値のあるテーマか。

イ テーマ設定の理由

- ・できるだけ分かりやすく平易な文章で書き表します。
- ・3文程度で表現します。
- ・児童生徒の実態、指導上の課題、実践の見通し等を記述します。

(記述例) ※テーマ「自信をもって自分の考えを表現できる国語の授業づくり」

授業での生徒の様子を見ると、発言が数名に限られていて、発言内容も文章ではなく単語レベルで発言している場合が多い。これは、授業が一斉指導中心のため、発言の機会が限られていることが原因であると考えられる。そこで、今回の研修においては、一斉指導以外の指導の充実に取り組むことで、自分の考えを相手に伝わるように述べることのできる生徒を育てる授業について実践してみたい。

- ・1文目 児童生徒の実態
- ・2文目 指導上の課題
- ・3文目 実践の見通し（実践のゴールを目指して）

◆担当者の心構え2◆

あくまでも、記述例なので、助言の際には、文章構成や内容について、この形にこだわらないように助言します。

◆助言のポイント◆

- ①読む人が一読して分かる文章となっているか。
- ②生徒の実態と、指導の課題が関連してとらえられているか。
- ③実践のゴールが具体的で実現可能なものか。

ウ テーマ達成のための手立て

- ・ こういうことをすればテーマを達成できるだろうという具体的な取組を考えます。
- ・ 取組は、実践可能な最小限に絞ることが望ましいでしょう。
- ・ 実践を繰り返す場合には、1回目の実践の考察後に取組を修正する場合も考えられます。その場合、修正が分かるように記録しておくことが大切です。

(取組の例) ※テーマ「自信をもって自分の考えを表現できる国語の授業づくり」

- ① 単位時間の中に必ずグループ学習を取り入れて、全員が発言できる機会を設定する。
- ② グループ学習の進め方について、手引きをつくる。
- ③ 事前に発表の仕方を指導する。(例；結論を述べて理由を2つ述べる)

◆担当者の心構え3◆

研修者のアイデアを広げるという観点から、必要に応じ、担当者の経験や書籍などを基に具体的に助言します。

◆助言のポイント◆

- ①この他に、テーマ達成に向けた取組として考えられることはないか。
- ②取組は、ゴールにつながるものか。
- ③実践できる無理のない内容となっているか。

エ 研修のスケジュール

- ・ 実践可能な無理のない計画を立てることが最も重要です。
- ・ 計画やまとめの時期を考慮しながら、実践の期間を決めます。
- ・ 実践の具体的な内容は、学習指導案、略案、指導計画等に表示し、ここでは実践の方法の計画を立てます。
- ・ 計画→実践→分析・考察のサイクルが1回の場合も考えられますが、サイクルが2回の場合には、1回目から2回目に移る際に、取組の見直しを図ることも考えられます。

(記入例) ※テーマが「自信をもって自分の考えを表現できる国語の授業づくり」の場合

月日	実践の場	実践内容
4/27 (月)	担当者との相談	自己研修計画書について
5/1 (金)	担当者との相談	学習指導案の相談
5/7 (木)	担当者との相談	学習指導案の修正案の相談
5/11 (月)～19 (火)	実践① (国語の1単元)	6単位時間の実践
5/22 (金)	担当者との相談	実践①の考察
6/1 (月)	担当者との相談	具体的な取組の修正、学習指導案の相談
6/5 (金)	担当者との相談	学習指導案の修正案の相談
6/8 (月)～19 (金)	実践② (国語の1単元)	8単位時間の実践
6/26 (金)	担当者との相談	実践②の考察、2回の実践のまとめ
6/30 (火)	担当者との相談	自己研修のまとめ

◆担当者の心構え4◆

研修者に寄り添い、計画やまとめだけでなく、担当者が実践の様子も見ることができるような計画にします。

◆助言のポイント◆

- ①計画から実践までに十分な期間があるか。
- ②1回の実践がよいか、複数回の実践がよいか。
- ③まとめは、発表や報告に向けて適切な時期か。
- ④学校行事等を考慮し、実践が可能か。

オ 結果の観察・分析の計画

- ・テーマを取組のゴールと考え、設定した児童生徒のゴール像に迫ることができたかについて、どのように分析するか検討します。
- ・児童生徒の意識調査やペーパーテスト、教員の観察、ノートや学習シートへの記述内容等、児童生徒の表した事実で分析することを基本とします。

(記入例) ※テーマ「自信をもって自分の考えを表現できる国語の授業づくり」

観察・分析の項目	観察・分析の方法や材料
① 自信をもって表現（発表）できたか	授業での観察，生徒の自己評価
② 自分の考えをまとめられたか	授業での観察，生徒の自己評価 学習シートの記述内容

◆担当者の心構え5◆

観察・分析は、労力を考えて可能な範囲で行うことに留意します。

◆助言のポイント◆

- ①変容について、数値化できるものがあるか。
- ②集団の変容を見るか、個の変容を見るか。
- ③記述での分析を考えた時、事前に評価規準を考えることが必要か。

3 Do（実施）の段階

(1) 実施の計画

ア 授業実践の場合、実践計画の例として、次のようなものが考えられます。

- ・学習指導案を実践計画とする。(研究授業のスタイルでなくてもよい)
- ・授業構想(板書計画，発問内容)等をノートにまとめて，それを使って授業をする。
- ・授業で使う学習シートを指導計画とする。

イ 学級経営(係活動指導，SHR等)や生徒指導の実践の場合，実践計画の例として，次のことが考えられます。

- ・指導計画を作成する。(目的，目標，指導の計画等)
- ・指導資料(プリント等)を基に指導を計画する。

◆担当者の心構え6◆

計画の質を高めることは必要ですが、実践こそが大切であることに留意しましょう。

◆助言のポイント◆

- ①教科等のねらいに照らして計画が確かであるか。
- ②実践可能でシンプルな記述となっているか。

(2) 実施

- ア 実践記録をとることが大切であり、工夫として次のことが考えられます。
- ・学習指導案等の実践計画に、実際の指導、授業評価、気づきを書き加えて保存します。
 - ・映像や音声によって授業等の記録をとります。
 - ・板書や児童生徒の様子等を写真によって記録します。
 - ・児童生徒が記入したノートや学習シート等のコピーをとります。
- イ 結果の観察・分析を意識した実践とする工夫として、次のことが考えられます。
- ・学級の全体的な観察、特定の個人に絞った継続的な観察、顕著な生徒の観察など、観察の対象を決め、授業等での生徒の観察内容を記録します。
 - ・適切な時期に適切な自己評価を行います。
- ウ 評価のための実践、記録のための実践とならないように、授業や活動の本来の目的を見失わないように実践することが最も大切なことです。

◆担当者の心構え7◆

できるだけ、研修者の実践の様子を見に行きましょう。実践の段階では、研修者の質問以外の助言を控え、主体性を持たせます。

◆助言のポイント◆

- ①実践記録の対象が適切か。
- ②実践記録のとり方が適切か。
- ③他に記録の方法があるか。

4 Check（評価）の段階

(1) 結果の観察・分析

- ア 分析の仕方には、次のような手順が考えられます。
- ・実践した結果の事実をとらえ、その事実を集計・分類して示します。
 - ・結果から分かる事実を列挙します。
- イ 考察の仕方は、次のようにします。
- ・事実の意味している内容を推測します。
 - ・事実の原因となっている事柄を推測します。
 - ・分析した事実から、自分の課題と考えている事柄を類推して予測します。
- ウ 分析・考察の際には、以下のようなことが大切です。
- ・事実を客観的にとらえ、成果があったとする都合のよいデータだけを利用しない。
 - ・課題と考えられる事実がある場合は、どのように改善すればよいか考える。

◆担当者の心構え8◆

研修者の分析や考察が深まるような助言を心がけ、担当者の考えを押しつけないことに留意します。

◆助言のポイント◆

- ①結果を事実として整理できているか。
- ②分かった事実(分析)と自分の考え(考察)をきちんと書き分けているか。

(2) 振り返りとまとめ

- ・振り返りの内容を、「教員のための自己研修」p.16～18にあるDo&Checkシートを参考にまとめます。
- ・実践交流のためのレポート作成では、ガイドブックp.17の【様式2】に、実践内容、実践結果の分析・考察、自己研修の振り返りについてまとめます。Do&Checkシートを活用しながら簡潔にまとめるとよいでしょう。このときも、自己研修について発表したり報告したりする際の資料であることを意識して作成することが大切です。
- ・センター研修における報告資料は、【様式1】とあわせてA4判2ページを基本とします。

自己研修のまとめ【様式2】

(学校名 _____ 学年・領域 _____ 氏名 _____)

6 研修の記録

計画実施の内容をまとめて文章化します。表形式でもよいです。
「Do&Checkシート①」「ポートフォリオ」を拠り所とします。

7 実践結果の分析・考察

結果の観察・分析の内容をまとめて文章化します。
「Do&Checkシート①」「ポートフォリオ」を拠り所とします。

※以下のような内容が考えられます
(1)実践の結果（表やグラフなどで表してもよい）
(2)実践からわかること
(3)実践の意味・起きたことの原因等、考えられること
（児童生徒にとって、自分にとって）

8 自己研修の振り返り

振り返りの内容をまとめて文章化します。
「Do&Checkシート②」「ポートフォリオ」を拠り所とします。

※以下のような内容が考えられます
(1)テーマ達成に向けた実施内容に関する振り返り（成果や課題）
(2)テーマ設定～結果の観察・分析までの自己研修への取り組み方に関する振り返り（成果や課題）

校内の担当者に、気づいたことを書いていただきます。

9 担当者からのコメント

◆学校としての留意事項◆

- ①報告を目的として、まとめを行っていますが、時間をかけ過ぎないように助言します。
- ②担当者からのコメントは、研修者を励ます大きな要素であることに留意します。
- ③可能であれば、コメントは複数の担当者が記入します。

(3) 実践交流

- 評価については、以下のような方法が考えられます。
 - ・学校内で担当者に報告の場を職員会議や校内研究会の一部等に設定してもらう。
 - ・レポートを回覧し、コメントをもらう。
- 評価として、2年目研修の取組で作成したレポートを持ち寄り、3年目「センター研修」で交流します。

◆担当者の心構え9◆

研修者の意欲が高まる評価をすることが何より大切です。成果を中心に助言し、課題は自ら気づかせるようにします。

◆助言のポイント◆

- ①児童生徒が成長できた点は何か。
- ②研修者が成長できた点は何か。
- ③次の研修に生かせることは何か。
- ④研修者の気づいた課題を解決するための示唆。

5 Action（改善）の段階

(1) 次のサイクルへ

評価を経て、次の視点で自己研修の進め方について改善点を明らかにします。

- ・テーマを同じにするべきか、変えるべきか。
- ・取組内容の何をどう変えるか。
- ・実践計画はどのように見直せばよいか。
- ・どのように結果の観察・分析をすればよいか。
- ・実践の記録をどのようにとればよいか。
- ・分析・考察の際に注意しなければならないことは何か。
- ・まとめや振り返りはどのように行えばよいか。

◆担当者の心構え10◆

自己研修の取組全体を振り返り、次の自己研修につなげる意欲を高めるように心がけます。

◆助言のポイント◆

- ①自己研修の取組の中で、困難を感じたことは何か。どうすれば、その困難を克服できるか。
- ②自己研修の取組の中で、よかったことは何か。どうすれば、そのよさを継続できるか。

6 ポートフォリオ

自己研修では、研修の足跡を記録として蓄積するポートフォリオの取組が重要です。

ポートフォリオの取組により期待できること。

- ・ポートフォリオを蓄積，整理することで，自分の実践を振り返り，自己の成長や新たな課題が見え，レポートにまとめることができる。
- ・レポートやポートフォリオを持ち寄り，お互いの教育実践を交流することで自他の成長を確認したり，新たな自己課題やその改善に向けた手立てに気づいたりすることができる。
- ・新たな自己研修テーマの設定や，その改善に向けた取組がサイクルとなり，自己研修が継続していく。

◆担当者の心構え 11 ◆

ポートフォリオの蓄積と整理によって，自己の力量が高まることを伝えましょう。

◆助言のポイント◆

- ①時期を設定してポートフォリオを整理し，その時どのような所感をもったか。
- ②継続してとりためた資料を時系列に俯瞰し，児童生徒や研修者がどのように変化していった

Ⅲ 2年目「宿泊研修」における 研究協議「自己研修の発表と協議」について

1 目的

小学校，中学校，高等学校，特別支援学校の異校種間での交流を通して，自己研修の進め方及び研修者が抱える課題やその解決方法について理解を深め，今後の教員としての研修のあり方を学ぶ機会とする。

2 準備するもの

- (1) 自己研修計画書（様式1）をA4判1ページ以内にまとめたもの。
- (2) 研究協議「自己研修の発表と協議」の際に必要な学習指導案，学習プリント，板書の写真など，配付した方がよいと思われる最低限の資料。
- (3) 自己研修で蓄積，整理したポートフォリオや児童生徒のノート，作品など，研修者が示して見せたいもの。

3 自己研修計画書の事前提出について

平成29年度 2年目「宿泊研修」実施要項に記載する期日、方法で提出するものとする。

なお、年度の後半には、今年度の取組のまとめとして 自己研修計画書（様式1）と自己研修のまとめ（様式2）をA4判2ページ以内にまとめたものの提出を求める予定である。

4 研究協議の方法

平成29年度 2年目「宿泊研修」実施要項に記載された方法で「自己研修の発表と協議」を行う。

研究協議「自己研修の発表と協議」の詳細については、
平成29年度 2年目「宿泊研修」の実施要項を確認してください。

IV 3年目研修講座「センター研修」における 研究協議「自己研修の発表と協議」について

1 目的

自己研修の発表と協議のねらいは、各自が取り組んだテーマについて、課題解決が図られたかどうかという視点ではなく、昨年度までの自己研修の取組を通じて自分自身に身についた力、うまくいかなかった場合は、その原因を視点に発表・協議をすることにより、今後の自己研修の進め方を確認する。

2 準備するもの

- (1) 自己研修計画書（様式1）と自己研修のまとめ（様式2）をA4判2ページ以内にまとめたもの。
- (2) 研究協議「自己研修の発表と協議」の際に必要な学習指導案、学習プリント、板書の写真など、配付した方がよいと思われる最低限の資料。
- (3) 自己研修で蓄積、整理したポートフォリオや児童生徒のノート、作品など、研修者が示して見せたいもの。

3 自己研修計画書と自己研修のまとめの事前提出について

平成29年度 3年目研修講座 実施要項に記載された事項を確認し、提出するものとする。

4 研究協議の方法

平成29年度 3年目研修講座 実施要項に記載された方法で「自己研修の発表と協議」を行う。

研究協議「自己研修の発表と協議」の詳細については、
平成29年度 3年目研修講座「センター研修」の実施要項を、確認してください。

V 自己研修の流れ（小学校・中学校）

1 1年目

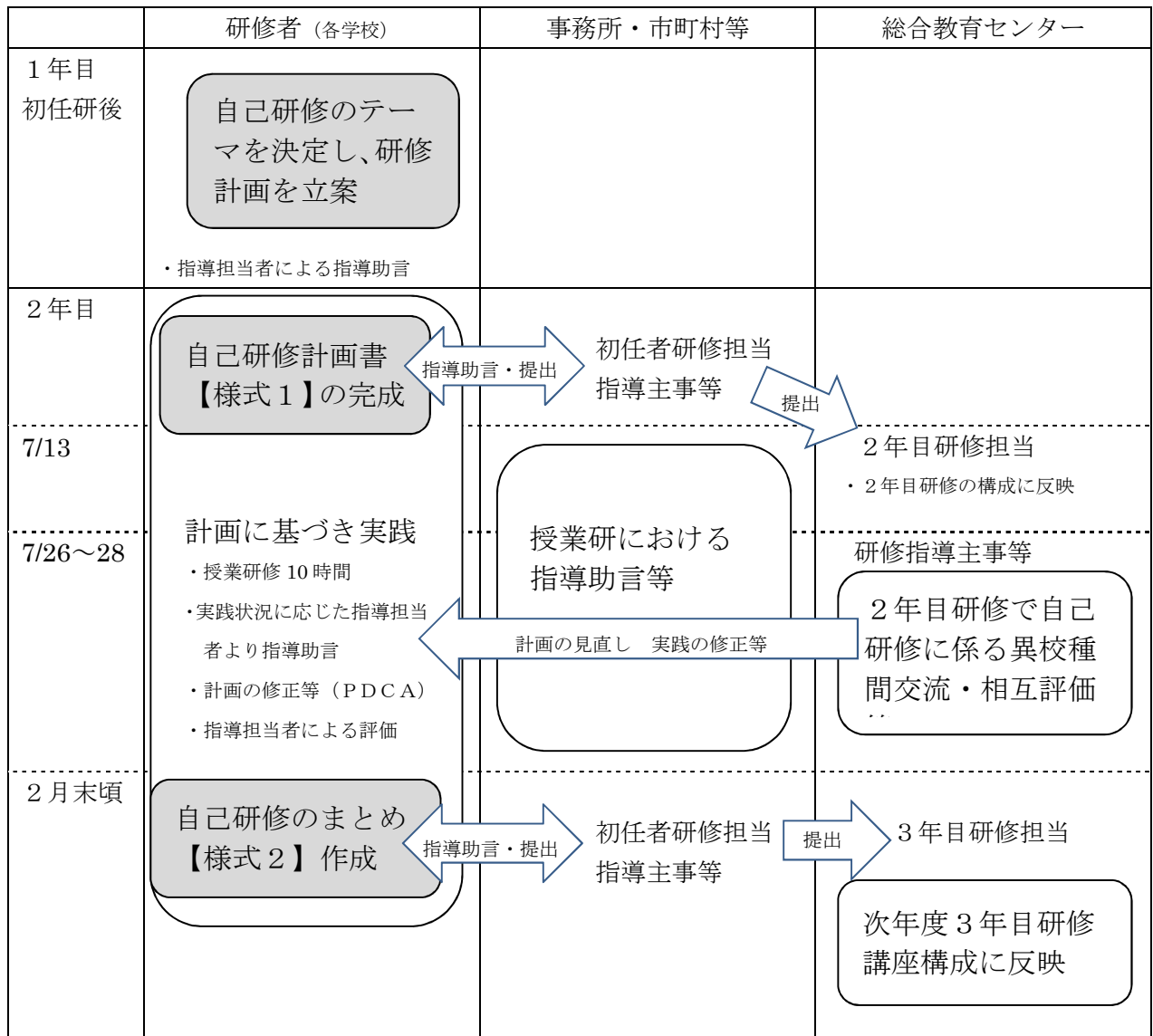
研修者は、総合教育センターで行われる初任者研修講座で、自己研修についての理論と進め方を学びます。初任者研修講座の内容は、以下の通りです。

センター研修Ⅱ（8～9月）	自己研修の意義と進め方を理解する。
センター研修Ⅲ（11月）	テーマの設定、解決の見通しの立て方、研修計画の立て方について理解する。

※ センター研修Ⅲ以降、2年目研修までに各自計画を立て可能な限り進めることを連絡

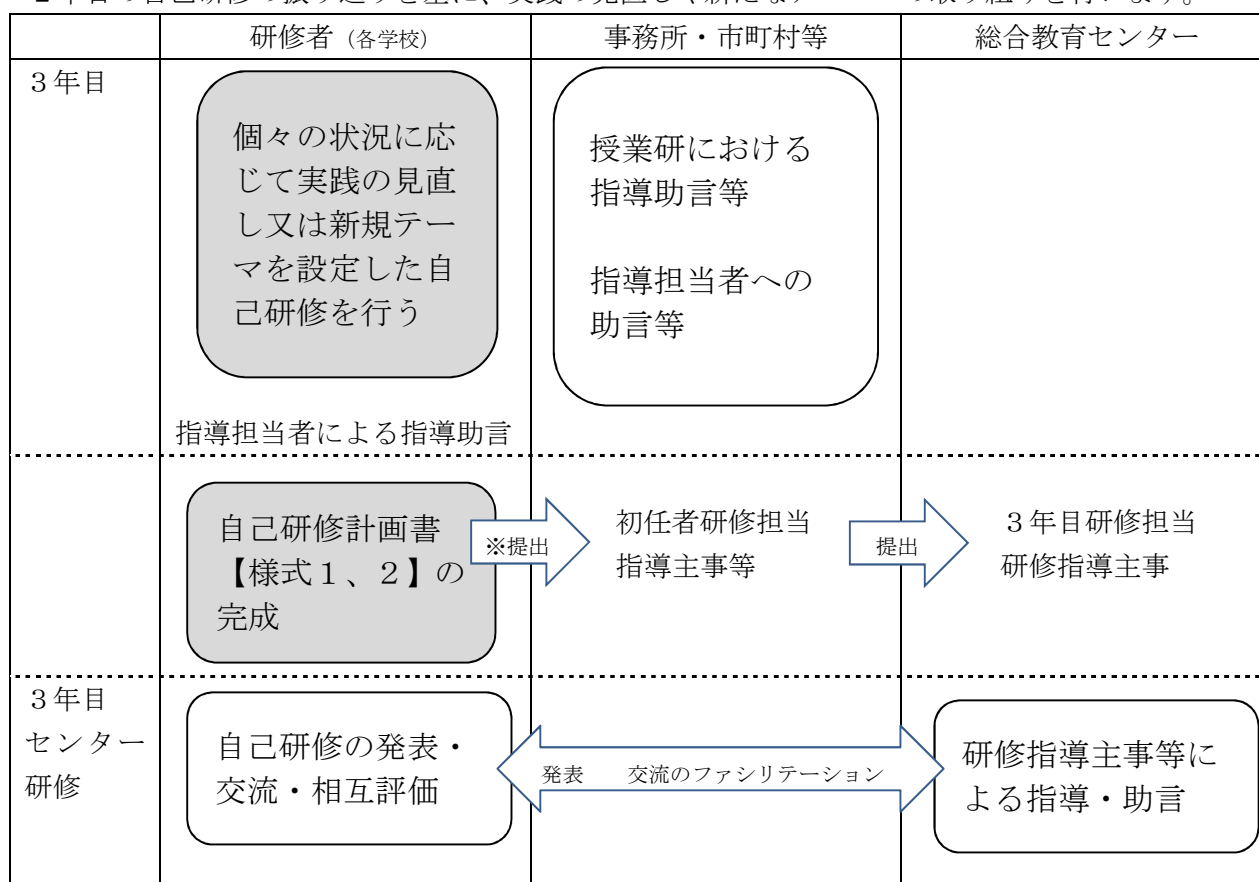
2 2年目

1年目で学んだ理論を基に研修計画を立て、校内の指導担当者や指導主事等の助言を受けながら自己研修を実践します。



3 3年目

2年目の自己研修の振り返りを基に、実践の見直しや新たなテーマへの取り組みを行います。



※提出期日については別途通知する。

4 4年目以降

研修者は、日常の実践の中で、常に課題意識を持ちながら自己研修を継続します。
自己研修について、後輩教員への指導も積極的に行います。

自己研修の流れ（高等学校・特別支援学校）

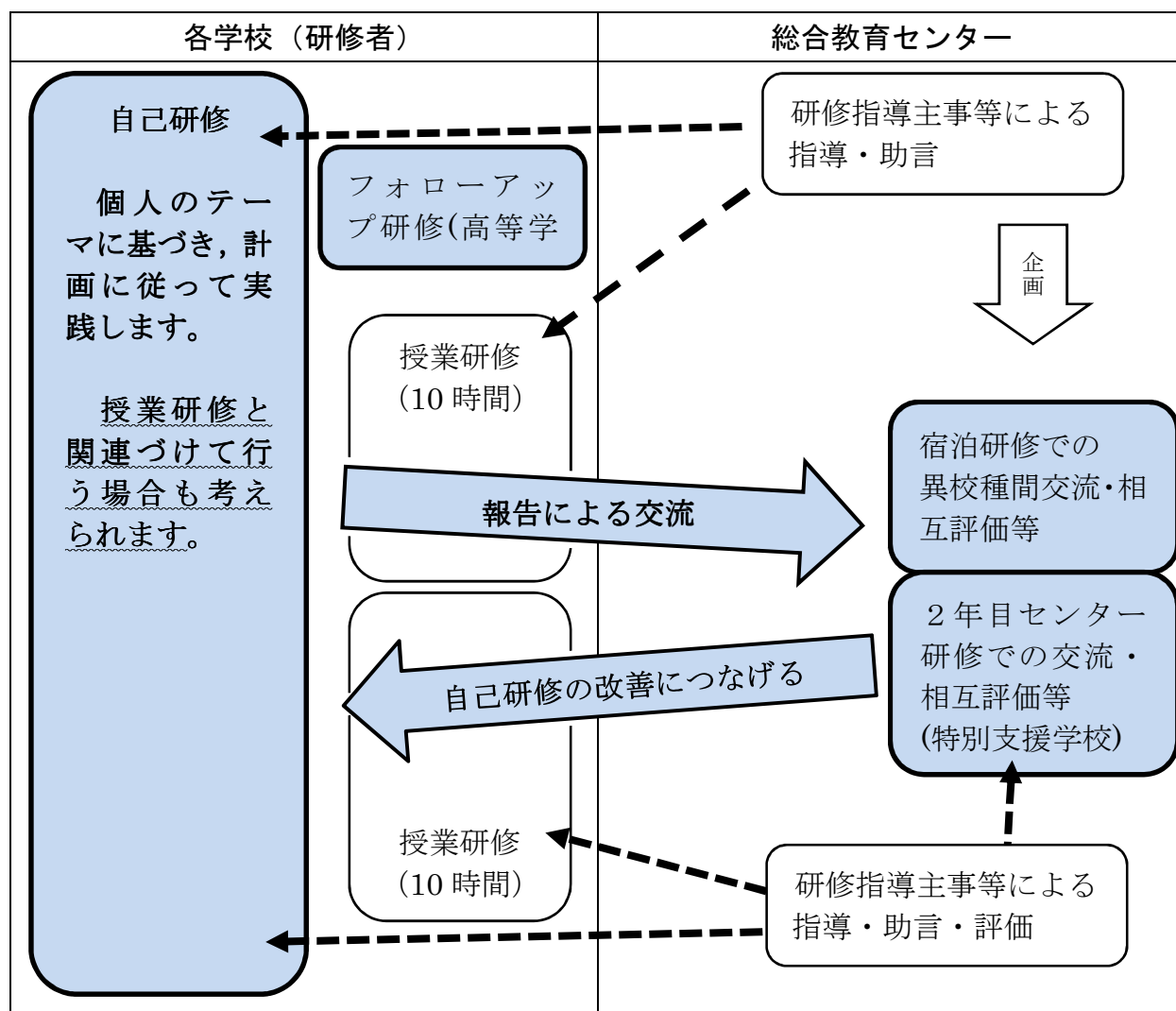
1 1年目

研修者は、総合教育センターで行われる初任者研修講座で、自己研修についての理論と進め方を学びます。初任者研修講座の内容は、以下の通りです。

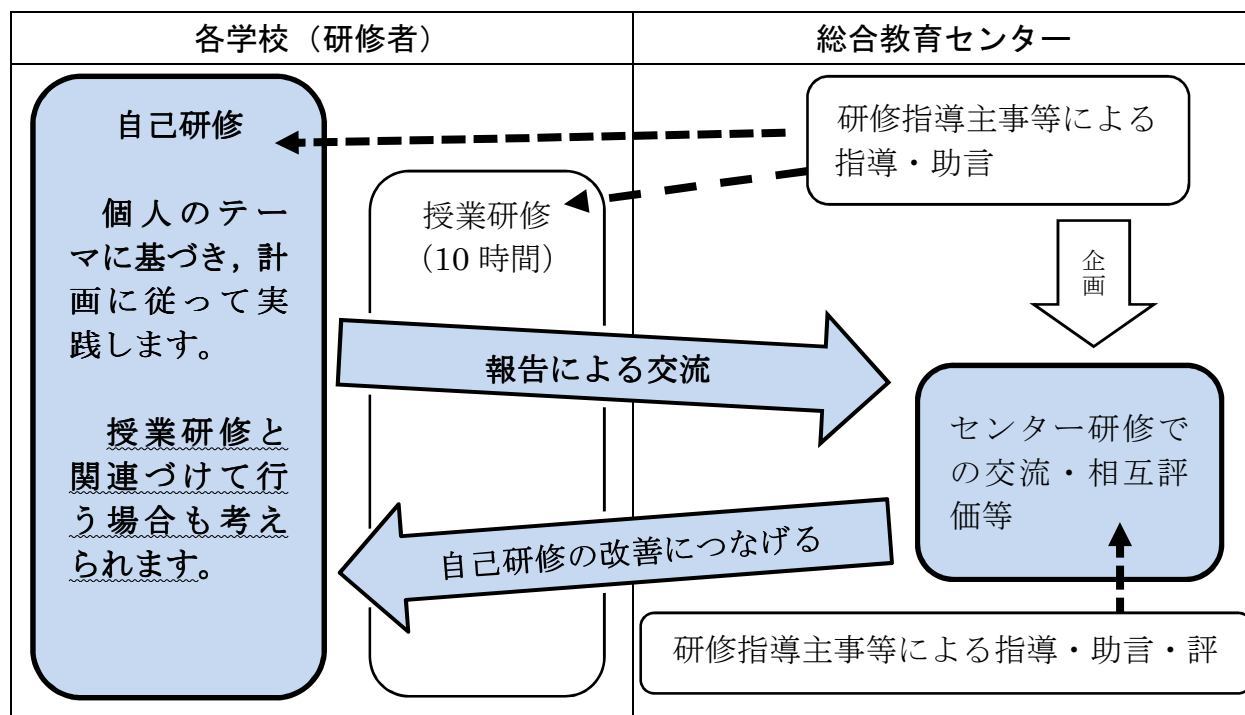
高等学校 センター研修Ⅲ（12月）	自己研修の意義と進め方を理解する。 テーマの設定、解決の見通しの立て方、研修計画の立て方について理解する。
特別支援学校 センター研修Ⅳ（12月）	

※ センター研修以降、2年目研修までに各自計画を立て可能な限り進めることを連絡

2 2年目



3 3年目



4 4年目以降

研修者は、日常の実践の中で、常に課題意識を持ちながら自己研修を継続します。自己研修について、後輩教員への指導も積極的に行います。

Ⅶ 「自己研修計画書」および「自己研修」のまとめ（様式集）

自己研修計画書【様式1】

学校名 _____ 学年・領域 _____ 氏名 _____

1 自己研修のテーマ

2 テーマ設定の理由

3 テーマ達成のための手立て

4 研修のスケジュール

月日	実践の場	実践内容

5 結果の観察、分析の計画

観察・分析の項目	観察・分析の方法や材料

※A 4 片面 1 枚以内に収めること

自己研修のまとめ【様式2】

6 研修の記録

7 実践結果の分析・考察

8 自己研修の振り返り

9 担当者からのコメント

--

※【様式1】と合わせて提出する場合、A4片面2枚以内に収めること

Ⅶ 「自己研修計画書」および「自己研修」のまとめの記入例

【記入例①】

学校名 □□□小学校 学年・領域 4年 算数 氏名 □□ □□

1 自己研修のテーマ

既習を活用して課題解決に取り組む算数科の指導の進め方

2 テーマ設定の理由

算数の授業の様子を見ると、これまでの学習を活用して課題解決に取り組むことができる児童が少ない。これは、これまでの学習が定着していなかったり、解決の見通し、学習の振り返りの段階での指導が不十分であったりすることが原因であると考え。そこで、今回の研修においては、見通し、振り返りの過程での指導に重点を置き、児童が既習を活用して課題解決できるような指導の方法について実践してみたい。

3 テーマ達成のための手立て

- ・解決の見通しの段階で、関係する既習事項、考えを確認する機会を設定する。
- ・振り返りの段階で、活用した既習事項、考えを確認する機会を設定する。
- ・算数コーナーを設置し、学習したことを掲示する。

4 研修のスケジュール

月日	実践の場	実践内容
4/27 (月)	担当者との相談	「自己研修」計画書の完成
5/8 (金)	担当者との相談	実践の進め方の相談
6/1 (月) ~ 6/16(火)	実践「たし算とひき算 の筆算」	研究授業を通じた実践 9時間単元
6/26 (金)	担当者との相談	実践の考察
7/7(火)	担当者との相談	「自己研修」のまとめ

※日々の実践として算数コーナーへの掲示

5 結果の観察、分析の計画

観察・分析の項目	観察・分析の方法や材料
既習を活用して課題解決に取り組むことができたか	授業での観察、学習ノートの記述、自己評価
算数コーナーの掲示が課題解決に役だったか	授業での観察、学習ノートの記述、自己評価

6 研修の記録

- ・単元を学習指導案を作成して実践し，授業記録，学習ノートの記録。(別添資料参照)
- ・日々の授業の板書の写真や学習ノートのコピー。(別添資料参照)

7 実践結果の分析・考察

- ・分析の結果(児童 35 人)

既習を活用して課題解決に取り組んでいるという児童が 10 人から 23 人に増えた。
算数コーナーの掲示が課題解決に役だったという児童が 30 人だった。

- ・既習を活用して課題解決に取り組む子どもが 2 倍以上に増えた。
- ・既習を活用するよさに気づき，さらに発展させて考える子どもが出てきた。
- ・学習の見通し等を教室環境(算数コーナー)に位置づけ，既習の活用を促すことができた。
- ・既習を活用して解決することで，統合，発展的な見方，考え方を育てることができる。
- ・既習の活用を意識した授業を考えることで，算数科の系統性を生かした指導の充実を図ることができる。

8 自己研修の振り返り

- ・6月の研究授業で実践の前に日々の実践として算数コーナーへの掲示を継続的行ったことで，既習を活用させる意識を子どもにもたせることができた。
- ・振り返りの時間を確保することが難しかった。見通しまでの段階の内容を整理しておく必要がある。

9 担当者からのコメント

- ・担当以外の先生方から積極的に学んでいる姿が素晴らしかったです。
- ・先生の努力が子どもの成長につながりましたね。

【記入例②】

学校名 〇〇〇中学校 学年・領域 2年・指示の仕方 氏名 〇〇 〇〇

1 自己研修のテーマ

「生徒が集中して学級活動や学習に取り組める説明・指示のあり方」について

2 テーマ設定の理由

学級活動や授業中において、生徒への指示・説明後、生徒が意図した行動をとらずに、迷っている表情を浮かべることが多い。これは、教師の指示・説明があいまいなため、生徒が、ねらいを理解して活動に取り組めないことが原因と考えられる。そこで、今回の研修では、生徒が集中して活動に取り組める説明・指示のあり方について、実践を通して考えていきたい。

3 テーマ達成のための手立て

説明・指示は短くはっきりと行う。

- ・説明⇒結論を先に述べ、話の一節一節を短くする。
- ・指示⇒1つの指示で1つの行動を促す。

4 研修のスケジュール

月日	実践の場	実践内容
4/28 (火)	担当者との相談	「自己研修」の計画書について
5/1 (金)	担当者との相談	体育祭の指導計画の相談
5/7 (火)	相談者との相談	体育祭の指導計画の修正案についての相談
5/11 (月) ～16 (土)	実践① (体育祭の学級指導)	体育祭の学級指導
5/20 (火)	担当者との相談	実践①の考察
5/27 (水)	担当者との相談	具体的な取組の修正、学習指導案の相談
6/3 (水)	担当者との相談	学習指導案の修正案の相談
6/8 (月) ～17 (水)	実践② (社会科の1単元)	社会科1単元6時間の実践
6/24 (水)	担当者との相談	実践②の考察、2回の実践のまとめ
6/29 (月)	担当者との相談	「自己研修のまとめ」

5 結果の観察、分析の計画

観察・分析の項目	観察・分析の方法や材料
生徒に伝えたい内容が正確に伝わったか。	生徒へのアンケート 活動及び授業における観察
生徒が集中して話を聞くことができたか。	活動及び授業における観察

6 研修の記録

- ・ 体育祭の学級指導計画（別添資料参照）
- ・ 学習指導案（別添資料参照）
- ・ 生徒の振り返りシート 自己評価欄（別添資料参照）

7 実践結果の分析・考察

- ・ アンケートより、実践前に比べ、「体育祭取組中（授業中）の先生の説明や指示は分かりやすかったですか。」に肯定的な回答をする生徒の割合が増えた。
- ・ 実践前に比べ、次のような生徒の姿が多く見られるようになった。
＜実践①＞目的意識を明確にもち活動している。
＜実践②＞授業中の活動がスムーズに進められるようになった。
ただし、実践1・2のいずれにおいても意欲的に活動できていない生徒が見られる。
- ・ 説明・指示を明確にすることは、生徒の活動意欲、学ぶ意欲の喚起につながる。
- ・ 説明・指示内容の吟味は、教師にとって取組内容や教材内容の理解、指導内容の明確化につながる。
- ・ 生徒全員の目的意識や意欲を喚起するには、更に実践上の工夫・改善が必要である。

8 自己研修の振り返り

- ・ 説明や指示の内容を明確化する過程で、自分自身が行事や授業内容について理解を深めることができた。また、生徒理解にもつながった。
- ・ 学級の大半の生徒に対して、多少なりとも取組の効果が現れたが、未だに意欲的な活動や学習姿勢が見られない生徒もいる。
- ・ テーマ設定の段階で、自分自身を客観的に振り返る機会を得られた。
- ・ 実践計画について検討する段階で、自分一人では考えていなかった視点からアドバイスをいただき、実践の充実につながった。
- ・ より細かい部分まで考慮に入れて、実践を構想していくことの大切さを実感した。

9 担当者からのコメント

取組が進む中で、〇〇先生の実践意欲の高まりを強く感じました。また、その思いが徐々に生徒に伝わってきていることが、何より嬉しい成果ですね。今後とも、自分なりの問題意識をもち、一つ一つ実践を積み重ねていきましょう。

【記入例③】

学校名 ○○○高等学校 学年・領域 2年 英語 氏名 ○○ ○○

1 自己研修のテーマ

新出文法を活用する力を育てる英語の文法指導のあり方

2 テーマ設定の理由

新しく導入した文法項目が、実際の発話の場面になるとあまり使用されず、自分が使い慣れた言い方を繰り返す生徒が多く見受けられる。これは、新出文法を使う活動が少なかったことと、活動自体も文法の使用場面に焦点を当てたものでなかったことが原因として挙げられる。文法指導は導入と活動をセットとし、新出文法を多用する場面を設定し生徒に十分に活動させ、自信を持って新出文法を使って発話ができる生徒を育てたい。

3 テーマ達成のための手立て

- ・教科書中より指導する文法を整理し、新出文法が授業で多く使用できるような場면을計画立案する。
- ・既習文法の指導をしながら活用を何度も繰り返し、定着させられるよう展開の仕方を工夫する。
- ・生徒の興味・関心をもとに、場面の導入や展開、共有の仕方を毎時間工夫する。

4 研修のスケジュール

月日	実践の場	実践内容
4/3(金)	担当者との相談	文法項目の整理と文法指導の計画案作成
4/6(月)～8(水)	担当者との相談	②, ③の具体的展開の仕方を検討
4/13(月)～24(金)	授業実践Ⅰ 担当者と随時相談	Lesson 1 (8時間)
4/27(月)	担当者との相談	授業実践の振り返り, 授業構想の検討・修正
4/28(火)～5/15(金)	授業実践Ⅱ 担当者と随時相談	Lesson 2 (8時間)
5/15(金)	パフォーマンス・テストⅠ	生徒の授業アンケート, 授業実践の自己反省
5/18(月)	担当者との相談	授業実践の振り返り, 授業構想の検討・修正 研究授業の構想案, 方向性の検討
5/22(金)	担当者との相談	学習指導案の検討・修正
5/25(月)	校内研究授業Ⅰ	Lesson 3 Part2 (本時 2/8), 授業研究会 授業研究会を受けての今後の方向性の検討
5/26(火)～6/5(金)	授業実践Ⅲ	Lesson 3 終了, 授業実践Ⅰ～Ⅲの自己反省
6/10(水)	パフォーマンス・テストⅡ	生徒の授業アンケート, 授業実践Ⅰ～Ⅲの担当者 との振り返り, 考察

5 結果の観察, 分析の計画

観察・分析の項目	観察・分析の方法や材料
新出文法の使用場面の設定(時間, 導入展開)が適切であったか。	生徒の授業感想, 英語科教員の意見
生徒が発話の中で, 新出文法を活用できたか	パフォーマンス・テスト(使用場面を限定して, 新出文法使用頻度をチェック)

6 研修の記録

- ・授業構想 1 Lesson 分（別添資料参照）
- ・学習指導案（別添資料参照）
- ・生徒の授業アンケートの記述とそれを集計したもの（別添資料参照）
- ・授業実践の反省（別添資料参照）

7 実践結果の分析・考察

- ・担当者，授業参観者，生徒の感想や意見で，肯定的な意見が多くなってきた。
- ・パフォーマンス・テストで，新出文法を使おうとする意欲の高まりが見られる。
- ・生徒の授業アンケートの結果では，もっと練習時間がほしいという意見が多い。
- ・小さいPDCA サイクルを回す授業改善で，授業内容が目に見える形で改善できた。
- ・使用場面の導入・展開に関して，生徒の興味・関心を引きつけることができ，生徒は飽きずに活動できた。
- ・他者からの意見，特に生徒からの率直な感想は，自分の授業改善に大いに役立つ。
- ・目標とその評価の方法の具体的設定で，生徒にとって「何を」「どこまで」求められているのかがはっきりし，取組が容易になる。
- ・練習時間の要求は，生徒が目標を自身の中で具体化し，そしてその達成へ向けて活動への意欲が高まったことを示している。

8 自己研修の振り返り

- ・年度初めに，担当学年で扱う文法の整理とその文法項目が多用される場面を事前に整理・計画することで，それぞれの単元において，余裕をもって生徒の興味・関心に対応することができた。
- ・パフォーマンス・テストの実施において，事前に「何を」「どのくらい」要求するのかを提示でき，生徒が具体的に目標を持って取り組むことができた。
- ・文法項目の指導に予定以上の時間がかかる場合もあった。他の活動の時間を圧迫しないよう，設定時間に余裕を持ちつつ，しっかり時間管理をして進めるべきである。
- ・検証計画を事前に考えることで，指導の方向性が明確となり，取組がしやすくなった。
- ・今の課題を解決することを優先したかったが，学年全体で7月初めに開催されるスピーチコンテストへの取組にも時間が割かれ，後半は課題解決への取組が若干薄くなってしまったような感じがある。

9 担当者からのコメント

自分の考えを持って提案しつつ，他の意見を積極的に取り入れようとする姿勢が，授業改善につながっていると思います。特に，生徒の声に耳を傾けていることで，生徒自身にとっても自主的に授業を振り返るきっかけとなっているようです。一生懸命に授業改善しようという気持ちが生徒にも伝わって，生徒もそれに応えようと頑張っているようです。自己課題の克服以上に，成果が期待できます。

【記入例④】

学校名 □□支援学校 学年・領域 小学部5年 算数科 氏名 〇〇 〇〇

1 自己研修のテーマ

文章題の意味をイメージすることができる算数科の授業の工夫
 — 減法の意味を理解できる教材・教具の工夫を通して —

2 テーマ設定の理由

Aは、数を数えたり、加法の計算をしたりすることはできるが、その力を実生活の場面で生かすことが難しい児童である。また、減法の学習を絵や写真を用いたプリントで行ってきたが、「 $3 - 3 = 3$ 」「 $4 - 1 = 4$ 」となり、数がなくなること的理解できにくい様子である。このことから、Aは、減法の場面をイメージすることができないために、物がなくなること的理解できず、減法ができない状態であると考え。そこで、減法の場面を体感できる教材・教具の工夫により、場面をイメージし、減法問題を解くことができると考え、本テーマを設定した。

3 テーマ達成のための手立て

- (1) 操作活動により減法の意味を理解できる教材・教具の工夫
 - ・「物がなくなること」が体感できる教材・教具の作成と実践, 改善
 - ・「残りはいくつ(求残)」がわかる教材・教具の作成と実践, 改善
 - ・「いくつ減った(減少)」がわかる教材・教具の作成と実践, 改善
 - ・「違いはいくつ(求差)」がわかる教材・教具の作成と実践, 改善
 - ・「いくつ足りない(不足)」がわかる教材・教具の作成と実践, 改善
- (2) 児童の興味や意欲を引き出す教材・教具の工夫
 - ・好きな物, 興味のある物の調査(保護者, 本人)

4 研修のスケジュール

月日	実践の場	実践内容
5月18日(月)	担当者との相談	自己研修計画(案)の検討
5月25日(月)	学団会	教材・教具の構想, 授業計画(案)の検討
5月27~29日		教材・教具の作成
6月1~12日	授業実践Ⅰ	「物がなくなること」が体感できる教材・教具による学習
6月12日(金)	学団会	実践の振り返りと次の教材・教具の構想の検討
6月15~18日		教材・教具の作成
6月19~30日	授業実践Ⅱ	「残りはいくつ(求残)」がわかる教材・教具による学習
7月3日~10日	授業実践Ⅲ	「いくつ減った(減少)」がわかる教材・教具による学習
7月13~17日	授業実践Ⅳ	「違いはいくつ(求差)」がわかる教材・教具による学習
7月20日(月)	担当者との相談	授業実践の振り返り, 改善点の検討
8月24~28日	授業実践Ⅴ	「いくつ足りない(不足)」がわかる教材・教具による学習
9月3日(木)	担当者との相談	自己研修のまとめ

5 結果の観察, 分析の計画

観察・検証の項目	観察・検証の方法や材料
(1) 文章題に合わせて教材・教具を操作できたか	授業の観察, Aの自己評価, 他教師の評価
(2) 教材・教具を操作し, 減法の意味を理解できたか	授業の観察, Aの自己評価, 他教師の評価
(3) 減法の計算ができたか	計算プリント, 文章題のプリント

6 研修の記録

- (1) 教材・教具の写真と改善の記録
- (2) 略案の作成と授業記録
- (3) 授業のビデオ
- (4) 学習プリントの結果

7 実践結果の分析・考察

(1) 実践の結果

取組前は、減法のプリントを自力で解決することは難しかったが、教材・教具を操作しながら、自力で取り組み、100%の正解率をあげることができるようになった。また、生活場面でも促されると、減法で計算することができた。

(2) 実践から分かること

- ・自分の生活の身近な場면을想定した教材・教具を操作することにより、意欲的に取り組み、一人で学習を進めることができた。
- ・文章だけではイメージできない状況を、教材・教具を操作することにより、場면을イメージし、減法の状況を理解することができた。
- ・計算力が生活場面に結び付きにくいAであるが、操作活動の学習により、実生活でも活用できるようになってきた。

(3) 実践の意味・事実の原因等、考えられること

- ・減法ができない要因をイメージ力の不足と見立て、場면을想定した操作活動ができる教材・教具を工夫した。それにより課題が解決できたことは、見立てが確かであったと考えられる。今後も、Aのイメージ力を補助する支援を行うことにより、様々な活動において、できる状況をつくることができると考える。

8 自己研修の振り返り

(1) テーマ達成に向けた授業等の実践内容に関する振り返り

成果：児童の見立てから、教材・教具を作成したことで、効果のある教材・教具を工夫することができた。また、教材・教具に、Aや家族、クラスメートなどの写真や好きなキャラクター、物語などを活用したことで、楽しみながら生き生きと意欲的に取り組むことができた。減法の意味を理解し、減法を生活場面でも活用できるようになってきた。

課題：本児の得意な計算力を実生活にスムーズにつなげる方法を検討していく。減法以外の学習にも今回の実践から得た教材・教具の工夫を生かしていく。5人の児童に違う学習課題を実施する場合の指導の工夫を検討していく。

(2) 自己研修への取り組み方に関する振り返り

成果：教材・教具を工夫することにより、児童が自学することが可能になることを学び、教材・教具の工夫を大切にしていきたい。また、児童から作ってほしい教材・教具や改善してほしい点などが提案され、そういう面での児童主体の授業づくりも心がけたいと思う。

課題：授業展開や他児との関係、生活単元学習などとの関連などについて、担当の先生や学団の先生方から、もっとアドバイスをいただき、改善していくことが必要であった。

9 担当者からのコメント

保護者や本児のアイディアを取り入れながら、教材・教具を工夫し、児童は、「わかる」「できる」実感を持つことができ、算数は大好きな学習の時間となっています。授業中の集中度、意欲、達成感から本児の伸びと実践の効果を感じます。今後は、支援を減少させていく方法、実生活に結びつける方法を考えていきたいと思います。

初任者・2年目・3年目
研修における
自己研修の進め方

～年間の取組と集合研修に向けて～

平成29年4月

発行 岩手県立総合教育センター
花巻市北湯口2-82-1
〒020-0395 TEL 0198-27-2711

発行者 岩手県立総合教育センター
研修推進委員会